



台湾原住民運動後の部落に生きる「現代頭目」—— 台湾原住民族ルカイの伝統と権威をめぐるポリティ クスの民族誌

尤, 驍

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2023-03-25

(Date of Publication)

2025-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第8527号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100482275>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



学位論文の要約

台湾原住民運動後の部落に生きる「現代頭目」

——台湾原住民族ルカイの伝統と権威をめぐるポリティクスの
民族誌

2023年1月

神戸大学大学院国際文化学研究科

尤 驍

学位論文の要約

本論文の全体の研究目的は、現代社会に生きる台湾原住民族ルカイの伝統的な権威者である頭目、いわば「現代頭目」に基づく伝統と権威をめぐるポリティクスについて考察することにある。ルカイの部落のなかで頭目が占める地位の背後にある論理とポリティクスを明らかにしたうえで、頭目の地位を維持し再生産する諸活動と現在のルカイ社会との間の相互作用を解明する。

上記の研究目的を達成するために、本論文は、頭目の制度的な基盤の歴史的変容に十分に留意しながら、必ずしもそれを前提とせず、頭目をめぐるミクロレベルでの相互行為を、その場における具体的な人間関係とローカル・ポリティクスの中で捉えるというアプローチを採用する。頭目について、「消滅から復興へ」、あるいは「弱体化から象徴化へ」という図式だけでは回収できない現状の民族誌を描き出す。

本論文の結論として、ルカイの部落に生きる「現代頭目」の伝統と権威をめぐるポリティクスとは、「接ぎ木」(grafting)と呼ぶべき戦術を行使することである。「接ぎ木」の戦術とは、植民地化と近代化により従来の制度的な基盤を失った頭目の地位を、近代的な論理と社会組織に接ぎ合わせて、新しい論理と制度に基づいて地位を維持し再生産する文化実践である。それを通して再構築された「現代頭目」の地位は、従来の台湾原住民研究で描いた首長の有する伝統的な権威と異なり、現在の台湾原住民部落の内部と外部にある複数の論理の相互作用に応じて再構築された権威を纏っている地位である。

このような「現代頭目」の文化実践は、近代的な社会組織と市場経済と結びついた形で、部落に新たな不平等な権力関係の形成を促し、既存の植民地的、抑圧的な権力関係を持続させる可能性を有している。一方、それと同時に、政治権力と市場経済に選別された伝統文化と異なる新たな原住民文化を生み出し、脱植民地化の新たな可能性をもたらしている。この意味から、現在のルカイ社会に対して両義的、ジレンマの影響を与えているのである。

本論文は序章、終章、および9つの章から成り立っている。序章ではフィールドでの体験から本論文の問題意識と研究目的を提示する。第一章では、序章で提起したフィールドからの問いを先行研究に位置づけ、問題の所在を明らかにする。そのうえで、本論文のアプローチを明確にする。本論文のアプローチとは、ルカイの伝統的な権威者である頭目の制度的な基盤の歴史的な変容に十分に留意しながら、必ずしもそれを前提とせず、人々のミクロレベルでの頭目をめぐる相互行為を、その場面における具体的な人間関係とローカル・ポリティクスの中でとらえることである。さらに、下記の通り、本論文の3つの視点を明らかにする。

1. 「消滅／変容の物語」と「生成の物語」の結合へ注目
2. 現地社会における多様な語りと具体的な動態へ注目

3. 台湾原住民運動以降の原住民部落における権力関係とローカル・ポリティクスへ注目

続いて、第二章では台湾原住民という人々の基本的な情報を提示する。そのうえで、植民地化と権利回復運動の視点から、現在における台湾原住民社会の状況について紹介する。とりわけ、台湾原住民運動以降、原住民による主体的な文化復興と、行政機関・市場経済が主導する文化産業化が同時進行して絡み合っている「現代的」な社会状況を提示する。

第三章では、本論文の研究対象であるルカイという民族集団の社会状況に目を転じ、日本による植民地統治と戦後の国民党政権の同化政策、および1980年代の原住民族権利回復運動など一連の社会変化のなかで、ルカイの頭目の位置づけの変化の過程を通時的に説明する。

第四章では、調査地クンガダワンの具体的な状況に焦点を当てる。ミクロな視点に従い、クンガダワンの概要と歴史を紹介したうえで、頭目家ラルグアン家の歴史と現状を提示する。

第五章では、頭目家と平民層の両方の語りを取り上げ、クンガダワンの人々が抱く頭目の多様な文化像を提示する。現在のクンガダワンにおける、伝統と歴史をめぐる口頭伝承と、人びとの頭目をめぐる日常会話での語りを分析する。そのような作業を通して、従来の先行研究で取り上げられた神話伝承など、頭目の地位と権威に基づく諸観念が現在いかに認識されているのかについて考察する。

続いての第六章から第九章では、クンガダワンの頭目の逝去の前後に行われた、頭目をめぐる4つの出来事の現場を事例として取り上げて考察する。第六章では、クンガダワンで行われた婚姻儀礼に焦点を当てる。現在、ルカイ社会において、婚姻儀礼は最も伝統的と考えられる場面であり、頭目の伝統的役割が最も発揮される場面の1つである。婚姻儀礼の場面において、頭目への表敬行為をはじめ、参加者と頭目との相互行為を描き出す。それを通して、婚姻儀礼の場における、頭目が有する役割を明らかにする。婚姻儀礼において、頭目の伝統的な地位がいかに再生産され、頭目の権威がいかに顕在化しているのかについて検討する

第七章では、クンガダワンで大きな影響力を有した頭目の逝去に際して、部落のエリートたちが彼を記念するためにかつてなかった大規模な葬儀を考案して創出し、実行した経緯を取り上げる。台湾原住民運動以降の社会状況に生きる「現代頭目」という文化像がいかに頭目の葬儀の場面で創出されて表象されるのかについて検討する。

第八章では、頭目の逝去を契機として、頭目家ラルグアン家の出身者による系譜作成を事例として考察を行う。系譜作成を通して、頭目家が自分自身の地位を主張し、権威を部落の人々に承認させるための論理とポリティクスについて分析する。

第九章では、クンガダワンで最も重要な年中行事であり、観光化された伝統祭典である黒米祭の沿革における頭目家の関わりに注目する。頭目家の人がいかに伝統祭典を通して、頭目の文化像を再び伝統文化の中心に位置づけ、頭目と部落の相互関係を再編しながら、

頭目家の地位と権威を顕在化させているのかを明らかにする。

総合考察となる終章では、まず序章で述べた本論文の問題意識に立ち戻り、民族誌的記述から明らかになった点を総合的に考察する。そのうえで、台湾原住民運動以降のルカイの部落のなかで、「現代頭目」の地位の維持と再生産をめぐる文化実践の背後の論理とポリティクスを分析する。「接ぎ木」の戦術と呼ぶべき「現代頭目」の地位の維持と再生産をめぐる文化実践を可能にする社会的要因と、これらの文化実践が現在の部落にもたらす影響について検討する。

最後に、これまでの台湾原住民ルカイ、およびパイワン社会を理解するための分析枠組みである首長制を再検討する。そのうえで、台湾原住民運動以降の社会状況を念頭に置きながら、現在におけるルカイの「現代頭目」に着目する意義と、「現代頭目」をいかに理論的に捉えるのかについて考察する。